（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）　大正十二年一月廿五日　第百五十九号　（毎月廿五日定期發行）

岐蘇林友

目次

卷頭之辭
興るべき小山林會……宮下孝美
岐蘇林友とメス……鷹見動
いとこの君へ……井出進
愚かな者の想へる……中村五郎
雪てひど目に遭つた話……岡西猛
會員名簿を手にして……越畔
安筑藻門會便り……岡西生
木曾在住十六回卒業生親睦會報……佐藤誠一
彙報……
諸金領收報告……
編輯部より……
特別廣告……校友會
廣告……木曾山林學校

謹賀新年

大正十二年一月

木曾山林學校
校友會

卷頭の辭

高光る日の母を戀ひ地球は廻り廻り極つて天は新となつたのである、薄明い煙ひる此の新玉の年立ち返る呵きは言葉を殘してそこにまざ〳〵と過去の幻影の上に未來の口笛を投げかけるのだ、毎年一陽來復と通り一遍の御慶がなで過すのは少しく羞耻を伴ふのである、個人社會共に急速に改造を斷行せねばならぬ要素が極めて多いのにも拘らず怠惰に慣れ、疲れに衰へて大切の日を徒費した悔が犇々と湧く、急ぐでもなく休むでもない地球は晝夜晝夜と廻轉して無際限な未來へ導いて行くかのやうに年々繰返す同じ行事でありながら人は其處に新たなる何物かを發見し其處に生きたい、凡そ事を新に企畫するにも改善するにも廢止するにも必ずや何事かの喜ばざる者を生ずるのは當然の事態である、且つ此等の數量は少くとも過去の惰力は烈しい、新しいものは創造であり創見である、これは動力で計畫であり希望である、本誌はこの動力を孕み計畫を含み希望に燃へて筆を取つた然し回を重ねて行く中には長いものに逢着もし、短いものも現出し、清いものも筆に成り、醜い宮、貧、萬態であつた、そこへ昨十一年七月改造の急先鋒一斷案は下された、然し人の世は夢の組立と聞いて居る、醒めた後にあの霞んだ夢を手探つて見ると甘い、それであの續きを追はんとするが墓ないものである、かくて又再び斷案のハンマーは振り翳されて居る、さゞなみ寄する黄金の希望、よう〳〵の懊惱、微凡と薫香との艶態の中に、はしやぐ歡喜、きれ〳〵に咲く薔薇の花の妖盃、新しい聲と聲、快なる筆と筆とが響き交はして青春の美しい我々の足跡を濡らすんだ、幸に御指導のやふさかならざらんことを、雙つの手に山林の星を握つて青錆びて行く机上の闇を飾りたいものである

興るべき小山林會

島根　宮下孝美

在校當時の華なやかな空想成功の夢見も卒業就職と同時に現實の蒼波に根底よりぶち壞されたのみならず生活の保證安定をさへ得難き程の實世界に放り出された自己の姿の餘りにプーアなのに自己の影のあまりに稀薄なのに將來の大成名與を期せすとも目前の生活が地方林業界の端しくれに貧弱な力弱い蠢動を續けるに過ぎないのに、より

幸福な人生より安易なる生活を得んと努力煩悶懊惱と動搖せる心で寧日なき光陰を過す事明けて七ヶ年林友諸賢に誠に御無沙汰致しましたが悲觀の中に樂觀あり困難の中に愉快があり貧乏の内に向上があり屈するか故に伸ぶる考ふれば絶体の悲觀も困難も貧乏もなく社會的位置に幸福收入の多寡に幸福などの問題は光風霽月今後は愉快に春葉に時々は林友誌上に愚説を載せて戴きませう

大正十二年の新春を迎へ身心を新たにし本年も亦御互の上に幸あれと祈ると共に微力ながらも林業界の發展向上に邁往猪突せんとするものである

顧みれば昨今まで黄金の夢尚覺めざりし農村も一般財界不況の大勢は用捨なく襲來し加ふるに米價の底落諸公課の膨脹は著しく農民の生活を脅威し平和なるべき農村も小作爭議の起り或は起らんとすの紛叫をしばしば見聞し誠に憂慮に耐へない處であるが其の反面に於ては耕地を賣却し山林の買入をなすもの及其他所有山林の繼續經營をなすもの、漸次多く交通不便極まる山間部に於てさへも昨年來著しく山林の價格騰貴したりと聞くが是等は山林經營の利益と安全を自覺しての結果に認むべきも然も其の割合に造林の盛にならざるは何を意味するものであろうか

山林の經營は經濟的感念のみでは實施は容易でない今假りに齢三十歳にして家督を相續し二家の財産を自己の意志通り運轉する境遇になり得て所有財産の增殖利用上大いに山林經營を起さんと考へんか林業は所謂百年の大計である一度び投資した其の收穫は其の人白髮の老人化した後に於て或は其の生存中に得られざるに想到せば今日の思想上より見て其の實現化は中々容易でない そこで所謂愛林思想の涵養を要する然し實際的に此の思想の普及と徹底を期せんには亦中々そう容易ではない先人の吾人に示した山を愛し森に親しましむる如き意を含んだ施設方法に就て寡聞の致す所が共鳴し得る多くのものを知らない愛林思想新熟語の頻々と現はるゝ今日に於て此の言葉既に陳腐な力弱い響きはないか私は茲に之れを山林愛撫心と言ひ換へ度い

山林の經營は經濟的感念の上に更に強い強い山林の愛撫心を要する即ち林業經營は山林に對する趣味と興味を中心としてフォンデエーションとして行かなければ駄目である然らば趣味は？興味は？如何にして養ふべきか私は端的に村山林會の設立によつて と答へ度い

我々は過去小學校の課程中に於て森林植物といふ題にて極めて概括的な智識を受けたのみで到底農作物に對する比ではないされば現在の大多數の農民は教育上の其他一段廣き意味に於ける修學上の機會的等を得て居なく農民は森林に親しみて娯樂を抱き得る智識と素質を養成されて居ないと言ひ得るであろう林業に對する理解力の薄弱である彼等に講演や不味乾燥な書籍に依つて山林愛撫心の普及に發達を計らんとするは事實上効果が少ないのである

吾人の此處に提唱せんとするは全然興味と趣味を根底とした施設でなければならない民衆娯樂といふ言葉がある簡明に言へば此の輕い意味を連想し得る村以下を單位とした小山林會の設立である是れに依つて最も捷徑に簡易に且つ比較的有効に其の目的を達し得るものと信んずるものである否私は數年來實際に實施して其の成績を見斯かく信んじて疑はないのである

此の山林會は戶主を中心とするか老人も子供も含ましむる而して其の村各大字を順番に主催地として毎年二回内外の會合を催し當番大字の老人の昔話經驗談少年の理想希望等は小學校長神職僧侶の隨意隨題の講演なんでもやる而して晝食を觀談と共にし午後は其の大字數個所の視察旅行をやる視察地は材料に種類を選ばない經營の整然たるもの規模の大なるもの立派な者のみか我等の視察すべきものではない卑近な平凡な未完成な所に我等は却つて多くの題材と珍らしき實例を發見する而して各視察地所有者の說明を聞き實地に實例を目の前にして村技術員の或は郡技術員の批評考察を加へる今後の撫育法を指示する疑義質問をつのつて答へる場合に依つては間伐枝打等の簡易な實習も行ふ斯くして視察地と視察地の間

には可成附近の神社佛閣を辿つて老樹名木の内稽傳說神話も聞き最後に村社に參村し金のか、らない實質的な記念品を配布して薄暮に離散する斯くの如き事を年々順次に繰返し年中行事の一とする村内に材料がなくなつたならば隣村に行く期日は一日で充分である年二回位一日でも宜しい九月頃の農閑期を利用し斯くして愉快なのんびりとした一日を氣愛々裡に送る九月と言へば初秋で氣候もよく實に樂しいもので毎年其の開催を待つ樣になるものである差程經費も要しまい尚苗圃を輕望し床替草取等の作業を行つても面白い事と想ふ是等は其の智識を得ると共に經費を節約し得て一擧兩得と言ふべきである斯くして老いも若きも和素融合し愉快に孜々として業務にいそしみ近時やかましき諸種の農村問題などはわけなく解決し樂にユートピヤを實現し得るであろう

斯くの如きは一見如何にも雄氣滿々低數極まるものに類する感あるも縣郡の山林會に出席し得るは極く少數の而も相當財産ある地主階級と其の開催地附近のものに限られて居る多數の農民は斯くの如き自由なく而も教養の程度は上述の如く各種關係雜誌式は名士の所說講演等は一段農民にとつて今日の處まだまだ餘りに難解であり專門的であつて興味も理解も起し得ない林業の進歩せざるはあがなち長期を要する事業なるが故にと早斷するを得ないではあるまいかされば林業智識の入門として斯くの如き方法によつて自然自然に林業方面に注意と興味を集め知らず知らずの間に智識を會得せしめ追々深き根底を作らしむる斯くして順次林業思想の豊かとなるに從ひ造林相合森林相合等は日に發達し成果を擧げ得るに至るであろう吾人は斯くの如き小山林會の發達を切望するものである而して是れによつて豊潤なる山林愛撫心を涵養し山岳に入つて蒼然たる森林に接し無限の神秘とインスピレーションを感じ得た喜びを普ねく農民に頒かたんとするものである（一二、一、三）

園原生

○文明の風さわ吹かぬひなれば
不景氣の波の音もきこえず

岐蘇林友とメス（其二）

鷹見動

◆坤軸一轉して美有新な今朝、天氣に溢る、生氣を吐合して差昇る初日を仰ぐ、何と云ふ神嚴さでせう何と云ふ雄大さでせう舊い光弱い光は悉く消え失せ新らしい光强い光は燦々として輝いて居る、實に此光こそ私達が過去の奮い位置に滿足することを許さない崇嚴さを持つて居る、若し此處に何事進展を希はず僅かに舊体を置守すると云ふ生活があれば、其れは老ひたる生活であり敗滅に刻々として近づきつゝある生活であらう

私達が道を歩行く時、仕事をする時、机に寄つた時、タイムの流と共に駿々乎として停止するを知らない四圍の美象を省觀する時は、其生活の瞬にも決して舊体に滿足せず、常に改造の努力を惜んではならないことが明瞭であらう、そして其處に所謂新しい生涯を見出さなければならない、斯した点から觀て今迄に於て岐蘇林友を如何にすべきかと云ふ問題が屢々繰返されて來たと云ふ事は、假令其内には或は根據の薄弱なものがあつたかも知れないが極めて有意義なことであらぬばならない

◆然るに此意義あるべき說なり論なりが繰返されても、其れは單に繰返すべき人が繰返すと云ふに止り、四圍の人々は全く無關心の有樣であり其多くは何等の効果をも認め得なかつたのである、此れは私の感覺の鈍さが然か思はしめたのかも知れないが、熱心に賢明な校林を抱擁する雜誌としては尠からず物足りなさを覺ねしめる

もとより私達は勤勞の對償として直に必ず報酬を得ようとは希はない、殊に改造とか改革と云ふことは何の事業によらず其實現を見る迄には余程の困難な努力を要することは、平常の生活上や過去に於ける史實上其證明を得るに難くないけれども校友それ自身が自分の巢立つた尊き母校の事業であり——事業と云ふのは或は穩當を缺くかも知れないが——自分義務であるべき岐蘇林友の發刊と云ふことをいて他人の仕事や義務

の様に考察され尠からぬ冷淡さ持つて來たかの様に觀ゆるのは、たとゑ其れが謙讓の德に富むだ人々の行爲とは云ひ乍ら誠に遺憾なことであるまいか

◆然らば敬すべき林友愛讀者たる校友の全部は月毎に岐蘇林友を手にすれば、其れで自分の目的は足り義務は終り、其處に何等の之についての希望も抱負も持たず、現在の狀態に滿足して自分が幾分なりとも其仲間入であることを感謝しつゝあるであらうか

灰色の雲が谷々を閉さして粉雪がチラチラする日の事務の余暇暖爐を圍んで校友二三人が集つた時、私達は母校を追懷することを忘れない、又は暑い日射を綠の木蔭にさけて隅然校友の或人と汗を拭ふ時、矢張母校の噂を談り出すことを惜まない、之等の時の多くは殆ど同じことを繰返されてありさ乍其處に無上の温味を覺えしめる

斯した場合に於ては色々の內容が追懷の器に盛られて居ることは勿論である一部なり其殆ど全部なりが岐蘇林友に就いての熱心な改革案や眞面目な希望や抱負を以て充たされて居る場合が決して尠くないと云ふ事は、假令それが私と云ふ個人に對する應接であるとしても甚だ心强さを持たしめる、そして之は岐蘇林友の現在について尠からず嫌たらなさを持つて居ることが表明して餘あるものと見るべきである

◆其處で校友の人達が多くの隱れた努力……表面に余り現れない、改革案や希望――を惜まぬにも係らず、たまたま林友に對する希望や抱負が誌上を通じて提案されても其れは單に一部の人達の余暇潰し道樂の樣に見られ、常に余り香しい結果を見ずに年を經ふて來て誰しも之を當然の如く考へて憚からないと云ふのは、其處に何かの障碍が纏はつて居ることを證據立ねばならない

私はこれを「卒業に對して校友會各部顧問若しくは母校の職員と呼はれる人々に對して」「雜誌編輯當事者と稱する人々に對して」の三個の分類を求め、詳細に忌憚なき看察を試み度いと思つて居るけれ共、それは岐蘇林友の改革熱が比較的强烈な光を放つて頭角を現はし來た當今に於て、余りに特急を要すべき事項とも考へられないからして、後の項にあつて余裕を認むる限りに於て書くことゝして、更に方面を變て散漫な筆を走らせて見度い　（未完）

○

元旦ややつばりくそもへもたれる　　咲也

いまこの日君へ

井出　進

甘君、僕は木曾谷へ來てからもう二年と云ふ時を過ごしてしまつた、その間にどれだけの力が養はれたらう、どれだけの心の糧を得ることが出來たらう、さう思ふと殆んどなつてしまふのだ、思へば如何に嚴肅なこと何にも今自分の頭に殘つて居るものはない樣な氣がする、後一年すればもうこの木曾谷にもサヨナラを告げなければならない時が來るのだ、それだのにこんなことでは、と思ふと何だか情ない樣な氣がして來る一体僕は此處へ來る時にどんな心持でやつて來たのだらう、只三年の間だけ辛棒してあの一葉の紙片を握りさへすればそれでよいのだと思つて來たのだつたらうか、否さうちあない筈だ、その三年と云ふ年月の間にはどんなにか多くのことをしやうと思つて來たのだつたらう、樣々な新らしい書物も讀んで見度い、新しい雜誌も讀んで見度い亦自分の好きな方面の勉强もゆつくりとして見度い、さうしてほんたうに人間らしい人間として社會に生きて行く道を發見したい、とそんな色々な期待や抱負を持つて來たちあなかつたらうか、それだのに現在のこの自分の有樣はどうだらう、果してその最初の望みに背かなかつたと云ひ得るだらうか、誠に心細い話だ、と云つてかうしてぐずぐずして居る間にも時は用捨なく過ぎて行つてしまふのだ、青春は再び歸つて來はしないのだ、若々しい華やかな希望に燃ゆるその懷かしい血潮の躍る青春は再び歸つて來はしないのだ、自分はもうその青春にはサヨナラを告げなければならないのだ寶玉の如く胸に秘められた數々のエピソードはやがて過ぎし日の思出としての語り草となつてしまふのだ、思へば如何に嚴肅な

時の力であることよ、尊い時の力であることよ、自分は今にして始めて青春の尊さとなつかしさとがしみじみと身に泌みて感じられる、永劫から永劫へ！無窮から窮へ！の時の流れよ、お前の偉大なる流れのうちに人間は、萬物は、生から死へ、死から生へ、と如何ばかり多くの流轉は重ねられることであらう

甘君！月の朧ろなあの春の宵、明るい灯の下で眸を輝がして華やかな未來を夢みた紅顏の美少年もやがては白髮の老翁となつて人生の榮枯盛衰のあはたゞしさを嘆きながら瞑せねばならない時が間もなくやつて來るのだと思ふと何だか骨でも刺される樣な痛切な人間性の悲哀が胸にこみあげて來る

こんな心持になつた時だらうね、あの佛蘭的のデカタン派の詩人が巴里の赤い灯の華やかなレストランに集つて强烈な刺戟を求める爲めの靑い酒赤い酒を酌み合はして刹那殺那の享樂にその身を忘れわづかに人生の寂しさを慰やしたと云ふのは

甘君！どんな偉さうなことや强さうなことを云つて見てもやつぱり人間と云ふものは孤獨な弱い寂しいものだね、然し誤解や猜疑や嫉妬ばかり充滿して居てほんたうに人を理解すると云ふことの極めて難い今の世にも僕はたつた獨りの君と云ふ人のあることをどんなに嬉しく心强くまた慰めに思つて蔭ながら感謝して居るか知れないよ、どんな時にも何時もあの温かい理解の眸で僕のすることを見て呉れ、聞いて呉れさうして絕わず僕を鞭韃して呉れる君はほんたうに僕の人生に惠ぐまれた得難い道づれだ

新なる年を迎へたので樣々な感想が僕の頭の中を往來して居る、それに長い間沈默ばかりして居たので久しぶりで君に逢つて心ゆくばかりこの胸のうちを語り度く思ふ、何時もの樣に君と亦口角泡を飛ばして人生の色々な問題を論じ合ふことの出來る日の來ることを僕は鶴首して待つて居る

都の今日此の頃は孔雀の樣な華やかな裝ひをこらした人々が行き交つて居ることでせう、時節柄身を厭ひ給へ　サヨナラ

一九二三、一、二

愚かな者の想へる

中村五郎

學校の門を出して貰つてから足掛九年滿七ヶ年と十ヶ月になるそして二十七歲の正月を迎へた、最初の一ヶ年は秋田の荷上場小林區置に、次の一ヶ年は故鄕の安曇に、次の一ヶ年は下諏訪の町役場に、次の四ヶ年は長野縣廳に、さうして一昨年の六月北海道に渡つて一ヶ年半を過ぎた譯だ顧みてそんなに長い氣はしないが人生の五分の一だと思ふと可成り長い氣もする

こうした回顧をしたからとて、嘘、の感嘆詞を前置きするやうに早合點して貰つては困る、悲觀するでもなければ樂觀するでもない、自分の神經はそれ程センティメンタルな鋭敏さを缺いて居る、唯此年頃にあつて極めて漫然と回顧されたに過ぎない、反省は企圖あつて始めて尊いといふ自分のこうした漫然たる回顧反省に如何なる企圖が伴ふだらうか

其間自分に接してゐて呉れた多くの人々は何んといふ平凡な人間だらう、また何んといふ馬鹿者だらう、或は、彼は失敗の化神だといふだらう、而し自分は自分自身の過去を顧みて、おゝよくも無事で暮して來た、とさう思はれる、全く自分の過去は自分で考へる時全く全く無事であつたと思ふより仕方がない、さうして其處に淡い悅びさへ感ずる、極めて平坦な道○であつた

地平線以下の人間は地平線に浮び出ずる事すら困難な事だ、而して地平線以下の人間が地平線を歩む事は一層困難の事だ、而も現在の世の中の人間の歩む總ての道程がそんなに平坦なものだらうか、過去に於て困つたと思つた事もある、まあよかつたと思つた事もある、そして困つたと思つた事の方がはるかに多かつたに相違ない、而も大した可もなく不可もなく平凡に無事に歩いて來た過去の道○に向つて自分は愚かな人間なるが故に、愚かな人間である事を自覺せるが故に淡い悅びさへ感ずる

敗殘者の諦めよ！、さう云つて笑つてくれては困る、いや笑つてくれてもい、、自分はひそかに此悅びを味つて居る、それは前

にもいつたやうに勿論悲觀しやな　樂觀
といふ程左樣に大げさなものでもない。愚
かな者に與へられた悅びとしてひそかに味
はつて居る、むしろ愚かなものに與へられ
た氣安さであり强味だと思ふから
そして將來に向つても自分は希望する、ど
うか平凡に無事に平擔に暮せるやうにと、
可もなく不可もなく平凡に無事に平擔に暮
せるやうにと、くれ〳〵も希望する、勿論
自然に降つて來る幸福（しやはせ）を退け
る程慾の皮はむけてゐない、而し强ひてそ
のしやはせを求めたくない、愚かな者には
その事既に苦しいもの、骨頂でありまた求
められるものでない事を知つて居る
人々は益々しやはせに向つて闘ふであらう
或者は勝ち或者は惜しくも敗殘者となるで
あらう、人々は常に此間に向つて、勇しく
といふ聲を心にきくだらうお、人々の奪ひ
つぐせる殘り屑があつたらそれを靜かに貰
はふ、それさへ靜かに與へられなかつたら
敢て闘ふ事をやめよ、殘り屑がなかつたら
それでもい、、平凡に無事に平坦に暮せる
やうに希つて居る
秘藏の劍は自ら別の機會にぬく可く與へら
れて居る　（一九一三、一、一日記）

雪でひどい目に遭つた話

岡西　猛

又雪の季節となつたスキースケートなど
冬季獨特の愉快を味ふと共に古くは八甲田
山の遭難、近くは昨年の親不知の慘劇の如
き聞くだも慄然たる經驗も亦味ば、なけれ
ばならぬ今年も既に早く朝鮮には雪の事件
があつた由である、私は茲に自分一個の身
の上に起つた小さな事ではあるが炬燵の夜
話の材料にもとつまらない事を書いて見や
りと思ふ
年は古いが大正六年から大正七年にかけ
ての大降雪の時私は會津にをつた土地の老
人はこんな大雪は初めてだといふ程で丁度
私は博士山官行事業所に勤め收獲豫算個所
調査書類の檢算で暫く若松に來てゐたが漸
く御用濟放免で又博士山の深山に今日歸る
といふ十一月四日の日と追憶するその日が
初雪で若松は約一寸位降つた、餘りの雪の
早さに驚いて此分では山も五六寸は降つた
んだらうと獨り想像してトボ〳〵と若松を
出立した、六里程來た博士山々麓にある松
坂といふ小部落には既に四五寸あり後から
來た主任の一回卒業生の日さんなんか自轉
車を押す始末であつた、私は脚氣で少し工
合が惡るかつたが一里先なる桑澤といふ部
落をさして進んだ後から來る四五人の人は
づん〳〵先へ行つて了ふので私も勇を鼓し
て進むが雪は益々多くなる許り少しも思ふ
樣に歩けない漸く六時頃そこに到着宿泊す
る事になつた積雪は二尺村の長老連も唯啞
然たるものであつた
翌日は本署技師若松署長主任其他十人位
が出發した皆カンヂキをつけて口々に雪を
驚歎しつゝ、二町程行つた時全く前進不可能
となり道戻りとなつた技師や署長は三十六
計此時と若松へ逃げ歸り私はその日も空し
く一日滯在翌る日午前中は少し雪がちらつ
いたので見合せたが金は少しもつてゐるし
事業所でも待つてゐる事だからと決心して
正午人夫一名をつれ出發した、人夫がカン
ヂキで雪を押へた後から私はオツフキを穿
いたきりて出立した足の工合でカンヂキは
用ひられなかつたのだ然し一人許りのカン
ヂキでどうして歩行が出來やう加ふるに足
はだん〳〵悪くなる、峠の頂上に辿ついた
頃は既にその邊は薄暗く凡そ四尺の積雪で
右の方の足が股迄雪の中に入る左を拔いて
半歩進めて更に右を拔かうとすると左方は
股迄入る、ステツキ代りの洋傘はボロ〳〵
になる、絶體絶命そこに瞑目すること十分
もうとつぷり暮れて掬の純林の畫も猶暗い
所心細い事此上もない、漸く下り目になる
と上りよりは幾らか樂だが身は全く弱つて
仲々捗らい、漸く事務所の灯が見ゐた時實
際蘇生の思をした、そこから林道を廻れば
づつと遠いが一直線に峯通りを切開いた道
があるのでそれを殆んど轉がつて下つた、
何しろ傾斜三十七八度あるが積雪の深い爲
に轉んでも怪我はない午後七時半皆に出迎
へられて炬燵の中にもぐり込んだ何しろ三
里足らずの道を七時間半かゝつたので元々
弱つて居る上に非常に疲れであつた

苦しさであつた
十一月中はさ程でもなかつたが十二月に
入つて降るは〳〵それは東北地方特有の吹
雪ときたら全く想像以上で一間離れて歩る
く時前の人の足跡はもう見ゐなくなる有樣
だ、粉雪が目の先きにくるので一寸先も見
ゐるか見ゐぬといふ次第である餘程注意し
ないと方角を違へ遂にお佗佛といふ事にな
る毎日こんな有樣で二里先なる郵便局から
は郵便の來る筈なく一週間乃至十日位交通
杜絶し郷里からの手紙も十五日目位に手に
入る其中屋根の雪を下せば積り積つて家根
以上になり事務室は晝間ランプをつけて執
務する程の暗さ、味噌汁の實がなくなつて
鯡の一本を半切し更にそれを細く刻んで五
六人です、るといふ心細さであつた、その
中人夫が漸く雪をわけて事務所にきて米の
缺乏を訴へられた時は私共は思はず顏を見
合せた、事務所の米を半分分けてやり愈々
明日は決死的行動に出で桑澤まで米背負に
行く事にした幸翌日は大した吹雪でもなく
屈强なる人夫に一日が、りで米を運搬して
貰つた
脚氣も十一月は大した事もなく糠なぞで
凌いでゐたが十二月に入つて病勢は進み腹
部迄痺れ指先も痺れペンを取るも辛ふじで
あつた醫者は何れも峠越しで六里行かねば
ならず絶望したが十二月十七日何日めかの
晴天で若松に行く者若松より來るもの四五
十名もあつた、私は準備してなくて好機を
逸した、その次の日からは打つて變つた猛
吹雪でビウ〳〵といふ音に私の神經はいら
だつ許りであつた廿日南の空が僅かに青い
所を見せたので人夫に背負つて貰ひ別れを
告げて出發し一町足らず上つた頃又吹雪襲
來で遂に果す事出來ず再び事務所に歸り失
望の餘り失神した人の樣になつてしまつた
二十二日の快晴の聲に呼起されて外を見
た、日本晴！私も勇み立ち周圍の人も喜ん
でくれた事務所の人や森林主事の方の御世
話を受け小屋の人や村の人の好意で桑澤迄
送つて頂く事にして出發した林道は背負つ
て貰ひそこから橇に落ちぬ樣に仕附けられ
て進んだ其格構は苦しい中にも滑稽であつ
た、連日の降雪で九尺幅の林道の形も見ゐ
ぬ先の三人がシャブルで道をあけ後三人位
が橇道を作り後九人が踏み附くる其あとか
ら私の橇が後押一人ついて進んだ自分の病
氣が斯く皆に迷惑かけるかと思ふと脚氣を
呪はざるを得なかつた漸く峠の下より目に
か、つた時あれ程晴れてゐたのが又吹雪に
變つた激しい吹雪の中で飯をバクつき午後
四時桑澤に着した丁度八時間を要したそこ
から松坂までは細い道だから背負つて貰ひ
その夜は松坂に泊つたまだ郷里迄は陸路六
里濕車三百哩といふ前途遼遠ではあるが峠
を越したといふ事に安心してよく寢つた
翌日は歩める丈歩み他は背負つて戴き高
田町に泊り此町より一週間程通はなかつた
馬車に茲まで送つてくれた友達に別れて乘
り出發した又一丁程來た處で道の惡い爲轉
覆し本日も駄目だといはれて如何しやうか
と途方に暮れて了つた、仕方がない止まり
と決心し遂若松迄歩み直ちに醫者に診察せ
しめ注射三本で歸省しても可なりとの言を
得て二十四日午前五時若松出發十時間も後
れて郷里に歸へつた
病身とは云へ自分と人とを斯くも苦しめ
たる大雪を自分は呪はざるを得ない雪に就
いて注意すべき事は何人でも知つてをる事
乍ら左に記して見やう
一、決して冒險せざる事吹雪は殊に注意を
要す
二、雪中旅行には糧食を充分携帶する事
三、服裝は粗末にても毛のものを着する事
四、なるべく地方人の言ふ事は服膺する事

以上

會員名簿を手にして

越畔

○毎年末送つて頂く會員名簿は懷しくも又
重寶千萬である夫れに就て思付いた事を
一寸述べて見たい
○蘇門系も最早東西南北に擴がつて其基礎
は大磐石となつた母校の名聲は彌が上に
發揚する我々の喜悅は勿論である
○夫れに朝鮮の岡戸氏（一回）は何時の間に
か產業技師で收まつて居る內地でも東京
大林區署だけでも若松、大町兩小林區署

長に即ち前者は中村氏(一回)後者は高橋氏(一回)が任命されてる別に郡山の官行造林署長に齋藤氏(一回)がある

○別に又山林局にあて目の前に山林事務官補がブラ下つてる遠藤氏(二回)或は新潟で産業主事に手が届いてる宇佐美氏(二回)もある

○モーッお目出度い話もある夫れは東京府の遠藤氏が愈々レコード破りをやるといふ噂である

イヤコウなると蘇門系は萬々歳だ何しろ一方に國立問題で騒がれるだけに其眞價も愈々發揮されて來た譯だ

○中には大僧正になる人もあろう醫學博士になる先生もあろう洋行歸りの哲學博士も出るだろう其外土木の親方さては實業家各々形は何麼でもよい

○お互は御嶽や駒ケ岳に授つたアノ氣概を忘れてはならぬ益々頭腦の結束を固うして世界を支配する域に達せねば以て瞑するに足らぬではないか喝！

○終りに名簿の誤謬を一二指摘したい僕は十回出であるから其知れる範圍で云ふのである

先づ十回の久保田吾良(岐阜縣廳)君と森戸吾良(長野縣廳)君とは同一人で後者は正である次に同じく十回の小谷益實(戸隠村)君と阿部益高(下伊那官行造林署)君とは姓名は前者が正で勤務先は後者でよい之も重複してる

○モーッある十一回の深美利一(石川縣)君は最早亡き人である宜しく閻魔の廳の方へ轉記すべしだ呵々

此外にも住所勤務先の違つて居る人が甚だ多い之は果して本人の罪か編纂者の罪か恐らく前者の人々の怠慢から來て居ると見た方が至當だらう

安筑蘇門會便り

岡西生

何んと言つても正月は氣分が違ふ、中にはちつとも違はないなんて連中も居るかしれないがまあ大ていの人はい、氣持で正月を祝ふだろう私もその仲間で大に祝つた、ところでこう云ふ時に蘇門出身者が會合して大氣焔を上るのも無意義でなく本年の幸先必ずよかろうとばかり新年氣分のうせない一月十三日淺間溫泉紅葉館に例會を開いた昨年の發會式から大分會員も出たり入つたりして今度通知を出した數は二十七人だつたが都合が惡く出席出來ない方もあり左の十二人と先生御二人計十四人の出席で甚だ少數で殘念であつた

加藤　純一　　黒岩　正平
和田　宗吉　　木村音次郎
柏澤　國治　　安藤　次郎
松島芳太郎　　關谷　靜夫
中垣　英一　　岡西　猛
樋口　勵　　市岡　巖

外に母校の西澤先生松本商業學校の宮川先生

加藤さんの「この會は呑み會にすぎないが言ふことの出來ない親みのある會であります……」の挨拶に始まりそろ〳〵メートルが上り始めた酒間を取もつ美形は淺間溫泉の第一流とまではゆかなくも山の人には格構の連中大小六人ときたから淺間の寒氣も何んのその大元氣その中に懷舊談がボツ〳〵出てきた

「加藤君はしよつちゆうT先生に叱られて居たつたネ口の余り言放しない黒岩御大が素拔く

「大平山から石をおとした時は皆驚いたしかに婆をやつたと思つたからネ」今は美鬚の紳士當時の茶目振を思い出して物語る其中に西澤先生の發議で各自出生地、年齢卒業年度、家族の關係現住所在勤地を名乘ることにした西澤先生は「かく申す私は松本を去る北方十余里の山中北安曇村の產でありまして女房は一人子供は四人……最後に年は美形の手前遠慮申上ますが氣だけはまだ若いのであります」きわどい所で逃をうたれた久しぶりで先生の口調を味ひ學校當時の造林學の講義を思ひ出した「第二番に罷り出ましたは松本產の安藤と申します女房は一人ありますがどうも發芽率が惡く後繼者がないので今晩は西澤先生に家に御泊りを願つて講義を願ひたい所存で居ります……さあ發芽率が大出來と

ころが不思議なことはこの發芽率の惡い方が大分大勢で、これは〳〵と驚いて居る時

「第六番に立ちましたは信越國境に生を得ました宮川と申します家族は女房一人子供五人第一號第二は女で他に嫁しづい其中長女は只今家に歸つて今晩にも破裂しそで若しそうなると私もお爺さんになる譯ですが氣はまだ中々若い意りです……」

それは何にしてもお目出度いことであると次から次へと名乘りがあり市岡君で終る次は乘仲さん木村さんの音頭は堂に入つたもの踊りは皆素的にうまい向ふ三間兩隣りの連中窓から顏を出して熱心に眺めて居たこれが濟むと伊那節相馬節黑岩さんのあほだら經、深川踊り、殺風景な山の人どうして玄人連全く跳しだこう云ふ具合で淺間溫泉のお湯もとまる位迄に歡をつくし午後九時半木曾山林學校萬歳安筑蘇門會萬歳西澤宮川先生胴上げで盛會裡に散會した人數は少いが他にみられない樂しい面白い會であつた筆を擱くにあたつて來るべき紅葉のときの會には皆振つて出席せられんことを希望しておきます潛越ながら幹事の方に代つて林友に書きました

琉球にて　園原生

人は北風寒いといふが
おらは戀しいなつかしい

岐蘇在中第十六回卒業生親睦會

福島　佐藤　誠一

實は自分が滿三年間東北地方に居住して居て最も痛切に感じた事は一種の寂漠でした即ち母校を包圍する蘇峡在住卒業年間に蘇門會なるもの、なかつた淋しさでした直接に母校に對する後援者であるべき蘇峡在住者間に此會の設立されて居なかつた事です此蘇門會の有無が如何に各地方蘇門會の意氣消長に影響する事でせう

他鄕殊に遠國に居らるゝ卒業生諸兄も定めし私と感を同じうせらるゝ事と信じます

偶々自分が歸省してから日頃の希望を滿したい思ひを層一層深くし爾來專ら時機の到來するのを待つたのですが仲々好機がなかつたのです私は考へました

之は容易に成立出來るものでない事を覺り最も近親の同級生の會合に端緒を開き順次手を擴げた方が最も近道でないかと思ひ新春早々實行する事にしましたのであります

左に勸誘狀の大要を記載し趣旨を明に致します

拜啓

光陰は流水の如く慌しくも亦歳暮を迎へ候御互に蘇門を出て、四年只々夢としか思はれず候其間御互が公私事多端想へ共通せざりしは又不得止の事と存せられ候然し乍ら御互に健全なる活動を續けらるゝは御同樣最も心強く感ずる次第に有之候

然も御互が此蘇峡に在住し相接間接母校を守護せらるゝは最も尊重すべき赤誠の披瀝と申すべく爲に卒業生各位が自由に海外に發展活動し得る次第にて家族制度の模範とすべく御互は內助の効を遂げつゝあるものにて候御承知の如く蘇峡在中卒業生中我第十六回卒業生は最も多數を有し居候いざ鎌倉と云ふ場合御互の責務は亦重大味を有するものにて候

就ては迎春に際し久方振りにて一樓に會し親睦會を開催し御互の舊情を温め旁々將來に對する何等かの組織的計畫をも致度候間何卒發起人の微意の存する處を御諒察の上此の會合をして最も有意義に成立せしむる樣御互の御援助を得奮て御賛成御出席せられむ事を切望致す次第に有之候

右に依り出席申込者

鷹見　勳君　　青木　忠太君
丸山　林一君　　廣井　昇君
山崎　多門君　　征矢　三郎君
喜多村　勇君　　井上新次郎君
奥村安太郎君　　吾輩以上十名

愈々一月四日福島町見晴樓に於て開催するに決定した處が遺憾乍ら會場其他の都合にて一日繰上げる事となり、電報、電話にて終日變更の通知をなしたる何れも差支へ多く僅かに左の五名の出席を得たるのみ其責罪は勿論發起人にある事を出席出來ざりし諸君に言明し深く謹愼の意を表します

山崎　多門君　　征矢　三郎君
喜多村　勇君　　奥村安太郎君

吾輩

場所は見晴樓一月三日午后六時より開催されました五名共時間の勵行をされた事が既に此會合を意義あらしめた因をなしたのであります、一同着席するや主に協議に移りました種々な問題も出何れも愼重審議されましたが重なる問題は言ふ迄もなく岐蘇々門會の設立でありました

之に對しては相當日時を要し先輩もある關係上、機會ある毎に勸誘し一日も早く設立せしめ樣と決議したのです

次で宴に移り僅かに五名なれ共何れも劣らてぬ精兵に黃吻な學生時代とは雲泥の差がありました、殊に喜多村君の鴨綠江節は堂に入つたものでした其れに藝妓が界隈切つての一流格と來て居るから

宴半に記念撮影をなし益々佳境に入り御互が心殘りなく十二分の歡を盡し十二時頃閉會致しましたが袂を分つ時御互の眉宇には意義ある再會を誓つて居ました

以上吾等の此會合の大略を申上げましたが此際一言蘇峽在住卒業生各位に申進ます吾々が此の會合をした、主なる目的は前述した通り蘇門會の設立であります、決して吾々は先輩を除けて卒先して此設立の發起者となるのではありません、何卒吾々の趣旨に御賛同下されまして一日も早く自發的行動を敢て御願ひする次第です

尙此の設立の可否に就て他鄕に居住せらる、各位の忌憚なき御意見を是非承りたいのであります、其れが最も有力な材料ではないかと確信して居ります（御免下さい）

一二、一、一七

彙報

◆小薗井先生來任　本月より小薗井澄先生本校に教鞭をとらる、事となれり、一昨年秋田鑛山專門學校御卒業后同縣横手中學に就職し一年志願兵として軍隊に服務し此度除隊、小橋先生の後任として來任物理化學地質を御擔任

◆本誌摘要

一月一日　四方拜　午前九時講堂に於て拜賀式擧行職員七名生徒七名參列

十　日　小薗井先生着任登校

十六日　始業、始業式擧行、式後新任小薗井先生の紹介挨拶あり、直ちに授業開始す放課後歡迎茶話會

◆會員消息

兒玉良人(生徒)松本歩兵第五十聯隊第六中隊五班に入營

月田喜代松(十五)秋田縣仙北郡生保田内小林區署へ轉勤

野見山定雄(十三)舊姓福澤を改姓福岡縣嘉積郡稻筑村

後藤豊吉(十六)京城府米倉町一〇六柳田友吉氏方

伊藤厚一(十五)高知縣土佐郡本川村住友山林課高萩詰所在勤

市岡新八(十一)長野廳北佐久郡々役所

伊藤善三(十四)長野縣上水内郡戸隱村

岩瀨幸吉(十一)愛知縣寶飯郡八幡村

長谷川房藏(十一)大阪市南區木津川町一丁目清水材木部

長谷部眞一(十)長野縣廳林務課等々力官一(十二)長野縣北安曇郡大町電氣會社

大森久保(一)上伊那郡伊那町帝林局分擔區官舍

大洞盛一(十)北海道地方費森林牛付事務所

大原猛志(十八)高知縣高岡郡大野見村島ノ川硏伐作業所

小崎次郎(十二)新潟縣中魚沼郡大割野信越電力會社文部

小縣正幸(十九)帝林局盛岡出張所

乙谷耕吾(二)大阪市天王寺西門南入高山堂

奥村和吉(十四)臺灣製腦會社新竹出張所

輪湖正由(一)東京府下高田町雜司ヶ谷四八三

加藤純一(二)東筑摩郡波多村前淵青木林業大野川事務所

加藤朝太郎(十二)栃木縣大田原小林區署

上條嘉一郎(四)東京府下西巢鴨町大字池袋二一三

上井乙之助(十八)岩手縣稗貫郡湯口村鉛保護區官舍

相澤國治(八)松本市南源地

可野敏郎(十七)岐阜縣郡上郡々役所

數野二郎(十八)甲府歩兵第四十九聯隊第六中隊へ入營

吉村幸助(十七)宮城縣廣瀨村愛子保護官舍

吉澤豊一(十六)東京府下南多摩郡横山村帝林局林業試驗所

北村巧(十七)舊姓米倉を改姓岐阜縣惠那郡付知帝林局出張所

高野金作(五)秋田大林區署

嶽野利雄(三)帝林局上松出張所

田中吟重(六)福島縣石城郡古河好間鑛業所

田近三郎(十九)樺太廳林務課

征矢野余所夫(九)東京府下南多摩郡横山村帝林局林業試驗所

中村五郎(十二)北海道天塩營林區分署

中澤揚(七)長野縣廳保安課

中畑佐耕(十三)平安南道内務部

仲谷馨(十六)下伊那郡和田村玉子製紙會社和田派出所

向井惟晨(十四)北海道十勝國歲別村富士製紙會社詰所

倉澤眞(二)鳥取縣廳林務課

伊藤得衛(十二)舊姓柳澤を改姓東京市日本橋區本町三ノ一七神戸岡崎銀行内

柳澤虎三(十八)松本歩兵五十聯隊第七中隊一年志願兵として入營

後藤克人(九)舊姓山村を改姓秋田大林區署

安江悅太郎(十八)臺灣總督嘉義營林所出張所

山下尙(十八)樺太大泊町玉子製紙會社

松澤莊太郎(六)新潟縣廳農林課

福井利吉(一)東京府下目黑里町字日暮里七〇

古根是(一)鹿兒島縣肝屬郡大根占小林區署

深澤佐愛(十七)山梨縣廳山林課

小林英一郎(十二)北安曇郡平村東信電氣會社葛監督所

小林右内(十五)北海道室蘭線早來驛

小原靜雄(十三)栃木縣今市小林區署

今野啓藏(十八)東京府下瀧ノ川町印刷局機械部育英舍

勃使河原角藏(四)名古屋市中區南長島町一丁目二番地

澤田富可(十三)新潟縣佐渡郡相川町

坂田勘太郎(十)宮崎縣西臼杵郡椎葉住友尾崎出張所

坂巻利一(十六)守山歩兵卅三聯隊第三中隊

木村音次郎(四)北安曇郡大町

宮下武夫(十六)岐阜縣益田郡小坂町帝林局分擔區

宮崎光治(八)茨城縣多賀郡松原町大字高萩

宮島岩見(十四)神戸市外原田四三三

三原忠一(十七)長野縣上田市松尾町

水橋要作(五)上高井郡須坂町

皆川秀雄(十四)北海道北見國斜里港富士製紙駐勤所

篠原忠治(二)三重縣宇治山田市神宮司廳

篠原爲一(九)樺太野田町玉子製紙會社

下平道雄(十四)新潟縣六日市小林區署

下平三雄(十五)臺灣臺北州羅東郡大平山

塩澤英一(六)岩手縣氣仙郡盛小林區署

廣瀨靜之進(四)青森市鐵道官舍第八號

森　巖(七)岐阜縣揖斐郡々役所

椙山節男(十七)岐阜縣帝林局高山出張所

鈴木繁(十四)東京府北豊島郡西巢鴨町大字池袋九山一六三〇

米山太郎吉(舊職員)靜岡縣立下田高等女學校に奉職

中村茂樹(同)舊姓征矢野を改姓岐阜縣惠那郡中津町へ住居

長谷川義雄(八)帝室林野管理局妻籠出張所

都竹武次郎(十二)北海道夕張町三菱大夕張炭坑に轉勤

小林敏二郎(十八)兵庫縣宋栗郡西谷村

木下武夫(十五)北海道十川郡名寄町地方費森林事務所

杉本貫二(二)樺太留多加支廳殖産係長拜命

◆林友代領收報告

一金貳圓也　米山　修君

一金貳圓也　奥原吉右工門君

一金壹圓也　（非會員）夏目　熊吉君

一金貳圓也　丸山　久雄君

一金參圓也　中田　辰雄君

一金參圓也　小田　寶君

一金壹圓也　北川　信美君

計金拾四圓也

◆記念會醵金領收報告

一金拾圓也　奥原吉右衛門君

一金拾圓也　林　省三君

一金五圓也　山本　茂君

一金貳拾圓也（殘）　中村　豊治君

一金五圓也（殘）　細窪友一郎君

一金四圓五拾錢　峯村　歳松君

一金八圓也　征矢野余所夫君

一金五圓也　吉澤　豊一君

計金六拾七圓五拾錢

累計金貳千參百貳拾貳圓也

◇特別廣告◇

岐蘇林友の改善につき會員諸君よりも種々注文がありますが目下の實情は改善は愚かなことが維持に苦心して居る有樣です岐蘇林友の發行部數は現在八以部許りで、二百部は在校會員に六百部は校外會員に配付して居ります、而して之に要する經費は年額四百圓許りですが、校外會員より雜誌代として納付せらるゝ額は年八十圓位のものですから殘りの三百二十圓は在校生徒で負擔して居ります校友會の總經費の約四割は雜誌發行の費用に取られますから其の他の校友會事業例令ば劍道柔道弓術庭球等の事業や學藝會に關する事業に要する經費に欠乏して何時も困難して居ります斯くまで他の事業を犧牲にして發行して居る岐蘇林友はどうかと云ふに諸君が先刻御承知の通りの有樣です、今後年々卒業生の增加するに從ひ發行部數も增加せねばなりませぬが、是迄の通りの新卒業生が五六ヶ年分の雜誌代として一圓五十錢納付せらるゝ以外校外よりの收入がないとしたならば、漸次紙面でも縮少して維持する外はないでありましょう、縮少又は縮少で終に廢刊の止むなきに至るやも知れません、明治三十五年以來同窓の溫交機關として發行し來れる岐蘇林友が、叙上の如く維持困難の狀態にあることは洵に憂慮に堪へませんから、大正十二年四月以降は左記の經營方法に依り將來の發展を圖りたいと思ひますが、之につき校友諸君の御意見を伺ひたいと考へます。

記

一、岐蘇林友發行事業は獨立經濟に依ること

二、校友會員たる在校職員生徒並卒業生は雜誌發行の維持費として年額金六拾錢を醵出すること

三、校友會基金として保管しある金四百圓は之を雜誌發行資金に充つる事

四、從來の規定により雜誌代金納付のものは三月迄の分を精算し剩餘ある時は四月以降の出金に充つる事

◆編輯部より◆ 都合により元の編輯形式にてまみします 特別廣告を御覽下さる樣願ひます 又入學志願者に就きても何分の御盡力を願ひます 會員諸君の渝らざる熱意のある夥多の賀狀に接し厚く感謝し猶眞の願ひとして會員諸兄の本年の奮勵努力を祈らざるを得ません

◇廣告

一、募集人員　一學年約九十名

一、入學資格　高等小學第二學年以上ノ課程ヲ修了シタルモノ

一、入學試驗　高等小學第二學年修了程度ノ算術理科及國語ノ試驗ヲ行フ

一、入學試驗ノ場所　木曾山林學校內但西筑摩郡以外ノ志望者ニハ志願者所在ノ郡役所ニテ行フ

一、入學試驗期日　三月末ノ見込（確定ノ上ハ通知ス）

一、入學願書〆切　三月廿五日限リ

一、入學試驗入學許可入學式等ノ事柄ハ志願者ヘ一々通知ヲナス

一、詳細ハ御照會ニ依リ入學試驗手續及「入學者のために」「入學のすゝめ」又ハ規則書ヲ送附ス志望者ハ至急本校ヘ御照會アリタシ

一、願書ハ至急差出スヲ宜シトス充分御便宜取計フベシ

大正十二年一月

長野縣木曾山林學校

【定價金參錢】

大正十二年一月廿三印刷
大正十二年一月廿五發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編輯兼發行人　安井正夫

長野縣松本市小柳町八十五番地
印刷人　淺川吉藏

長野縣松本市小柳町八十五番地
印刷所　淺川印刷所

長野縣西筑摩郡福島町三九番地
發行所　蘆澤書店